
【涼宮ハルヒ二次SS】 エンドレスエイト ~ 13104回目 ~

丸猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【涼宮ハルヒ二次SS】 エンドレスエイト 13104回目

【Nコード】

N8826H

【作者名】

丸猫

【あらすじ】

長門は俺に言った。「あなたが私に告白をしたパターンが一回だけある」と。そんなことを言われた俺はどうすればいい？しかもハルヒは目ざとく俺と長門のぎこちない関係に気づいちまうし。俺の気持ちは……。約594年、同じ夏休みのラスト二週間が繰り返されていた。そんな長い時間であれば、何が起きていても不思議ではない。これは俺たちの記憶から抹消されたはずの、ひとつの夏物語シークエンス。

プロローグ（前書き）

タイトルにもある通り、涼宮ハルヒシリーズの二次創作です。二次創作が苦手な方はご覧にならないことをお勧めします。

内容としては、原作よりも恋愛要素を5割位増ししています。キョンらしくないほど鈍キョンですし、ハルヒらしくないほど弱いハルヒですし、長門らしくないほど人間味ある長門です。

でも作者は原作設定を大事にしたいと考えています（言い訳です）

プロローグ

「ハルヒはどうなんだ。あいつはちょっとでも自覚しているのか」
「まったくしていないようですね。してもらっては困るというのもありますか……」

長門のほうへ流し目を送って古泉は宇宙人に尋ねた。さり気なく、それで、何回くらい僕たちは同じ二週間をリプレイしているのですか？」

長門は平気な顔で答えた。

「今回が、一万三千百四回目に該当する」

いちまんさんぜんひゃくよん。おもわずアラビア数字を考え出したアラブ人に感謝の祈りを捧げたくなった。それくらい途方もないヨタ話である。

「同じ二週間を一万何千回です。自分がそんなループに囚われていてと自覚して、記憶もそのまま蓄積するのだとしたら、通常の人間の精神では持たないでしょう。涼宮さんは、たぶん我々以上に完璧な記憶抹消を受けていると思いますよ」

「こう言つときは一番物知りに聞くに限る。俺は長門に確認してみました。」

「それはマジな話なのか？」

「そう」

「こくりと長門。」

するとだ。明日に俺たちがやる予定となっていることも、すでに俺たちは過去においてやってしまっているのか。この前の盆踊りと金魚すくいも？

「必ずしもそうではない」

長門は声にも表情はない。

「過去一万三千百三回のシークエンスにおいて、涼宮ハルヒが取った行動はすべて一致しているわけではない」

淡々と俺を見つめ続ける長門は、やはり淡々とこれまでの行動パターンを語り始めた。聞きながら、思う。ホント何をしているんだ、俺たちは。長門の説明を聞いているうちに頭が痛くなってきた。

「いや、もうい……」

「そして、あなたが私に告白をしたパターンが一回だけある」

エイリアン印の人造人間を黙らせようとしたが、そいつは最後に聞き捨てならぬことを言いやがった。この申告には流石のエスパ―も想定外だったらしく、啞然としている。シクシク泣かれていた未来人もウサギのような目を長門に向けていた。

誰も何も言わないので俺が質問することにした。一応の確認を。

「な、何を告白したんだ？」

「あなたが私に恋愛感情を持っていること
ますます空気が重くなった。」

なぜだ。どうして過去の俺は長門を好きになったというんだ。確かに長門は命の恩人だ。だが、そうだとしても……。

「ま、まあ、一万回以上も同じ時間を共有してきたのですから、何があっても不思議ではないでしょう」

古泉は冷静に分析した所見を述べ、話を区切った。俺がどうして長門に告ったのか、その理由も知りたいところだが突っつき所を間違えたくはない。やぶ蛇はご免だからな。

その時、俺はまだ未確認事項があることに気づいた。

「何でハルヒはこんなことをやっているんだ？」

「推測ですが、涼宮さんは夏休みを終わらせたくないでしょう。彼女の識いき下がそう思っているのですよ。だから終わらないわけです」

そんな登校拒否見みたいな理由でか。

古泉は缶コーヒーの縁を無意識のようになぞっている。

「彼女は夏休みにやり残したことがあると感じているのでしょうか。それをせずに新学期を迎えるわけにはいかない。それをしてからでないとい心残りがある。そのモヤモヤを抱えながら八月三十一日の夜を迎えて眠りに就き……」

目を覚ましたら綺麗さっぱり二週間分、時間を巻き戻しているってわけか。何というか、愛想も尽き果てるとはこのことだな。何でもする奴だとは知ってたけど、だんだん非常識レベルがランクアップしてるんじゃないか。

俺が頭を抱え始め、ハルヒは何が不満なのかを聞いた。しかし、古泉も長門でさえも、こればかりは解らないという。

まったく、またアホな話を聞いてしまった。

第一話

翌日は天体観測の番だった。

場所は長門のマンション屋上。せっかく古泉が望遠鏡を持ってきたというのに、わがまま神様は早々に天体観測に飽きてしまい、未確認飛行物体の探索に精を出したと思ったら、今はマイ・スウィート・エンジェルと肩を寄せ合って寝息を立てている。

俺と古泉は手すりに寄りかかって、二つの寝顔を眺めていた。

「何がしたいんだろうな、こいつは」

「さあ」

古泉は微笑を浮かべていた。そしてこんな事を言い出した。

「こんなのはどうです。背後から突然涼宮さんを抱きしめて、耳元でI love youとでも囁くんです」

「それを誰がするんだ」

「あなた以外に適役がいますかね」

「拒否権を発動するぜ。パスーだ」

「では、僕がやってみましょうか」

この時、俺はどんな顔をしていたか判らない。手鏡の持ち合わせがなかったんでな。だが古泉には見えたようで、

「ライトなジョークですよ。僕では役者が不足しています。涼宮さんを余計に混乱させるだけです」

古泉は悪戯心を浮かべた笑みで俺を見ていた。俺は顔を反らし、夏の夜空を見上げる長門の姿を見た。そして手すりから背中を離し、突っ立つショートヘア少女に話しかけた。

「いくらキレイでも、何回も見ていたら飽きるだろう」

「別に」

長門はあっさりと答えた。

少しの沈黙をおいてから、俺は気になっていたことを聞いてみた。「どうしてずっと黙っていたんだ、何回も同じ時間を繰り返してい

ることを」

「……私の役目は観察だから」

何となくだが、長門の返答は予想の範囲内だった。こいつが積極的にアプローチしてくることなんか滅多にない。最初にこいつの部屋に案内された、あの時くらいだ。ただ、能面のような長門の表情の裏にはやはり何かがあるようだ。少なくとも俺はそう感じる。

長門は再び夜空を眺め始めた。俺はじっと長門の顔を見ていた。いや、その裏にある何かを感じ取ろうとしていた。長門、どうしても何も言ってくれなかったんだ。観察が役目だからって、俺にはそんなことどうだっていい。一人で問題に悩んでいないで、誰かに、俺に話してくれて良いんだ。そんなことを心の中で考え始め、ついには「俺はこいつのために何が出来るんだ」と思考を巡らせ出した。

だが待てよ。どうして俺はこんな事を考えているんだ。長門がOS団の仲間だから？ ……本当にそれだけか？

そんな自問自答は一人の男により破断された。

「長門さん、少しお聞きしたいのですが」

古泉も手すりから身を起こし、俺たちの場所にやってきた。右手を上げながら。

「この一万三千百四回の中で、彼が涼宮さんに告白をしたパターンはありますか」

「っておい。何を聞いているんだ。」

「ない」

長門はこれまたあっさりと答えた。

「古泉、まさかおまえ……」

「ええ、そのまさかですよ。試しにやってみましょう。あなたが涼宮さんに告白するんです」

「だから、嫌だと言っているだろう」

「こんなにも願ってもダメですか？」

「ダメだ」

「フフ、では仕方ありませんね」

古泉は意味深なまでの笑みをして俺を見た。俺はふと長門の顔を見た。長門は変わらぬ無表情で俺を見ている。俺は何か嫌な予感を感じながら能面のような表情を見ていた。

第二話

次の日、昨夜の予感は的中した。昼過ぎの集合場所には俺とハルヒしかいなかったのだ。

三人が何故来ないかをハルヒに問うと、

「さあ。でも、さっき急に連絡が来て、体調が悪いんですって。ちょっと急ピッチではしゃぎ過ぎたかしら」

いや、昨夜にそんな兆候は見られなかった。古泉め、ハメやがったな。俺は昨日の古泉の言葉を思い返していた。

『あなたが涼宮さんに告白するんです』

あんのやろう、強硬手段に出やがったな。だが、一万回以上も同じ二週間を繰り返しているのなら、ダメもとで新たな試みをしてみても良いのかもしれない。何より、記憶を維持し退屈な日々を送っている長門のためにも。

…まただ。また俺は長門のことを考えている。どうしてこんなに長門のことを気にしているんだ。本当に俺は……。

「取り敢えずご飯にしましょう。お昼まででしょ。ちょっと話したいこともあったし」

ハルヒの発言により、またも俺の思考は中断された。俺とハルヒはいつもの行き着け喫茶店に足を運んだ。

「なあハルヒ。おまえはこの二週間で何がしたいんだ」

BLTサンドを頬張りながら、俺は問題の核心に触れてみた。当人は何にも気付いていないんだ。ストレートに聞いても何ら問題はあるまい。

「何よ、急に。言ったでしょ。高一の夏は一度きりしかないの。だから悔いの残らないようにするのよ」

ハルヒは物覚えの悪い児童を咎めるように言った。悔いの残らな

いように、だけどもまえは一万三千百三回も悔いを残して夏休みを終えている。だから一度きりしかないはずの高一の夏を何度も繰り返し返している。なんだ。おまえは何を心残りに感じているんだ。まさか、本当に俺と…。

いやいやいや、なにを俺はナルシストみたいなのを考えているんだ。こいつがそんなことを望んでいるはずが…。本当になんと言えぬのか。もし本当にそれが望みだしたら、俺は古泉の言う通りの行動をすべきなんじゃないのか。世界のためにか、朝比奈さんのためにか、長門のためにか、よくわからんが。

「なあ、ハル…」

「そんなことより、キョン。ちょっと聞きたいんだけどさ」

ハルヒは俺の質問を遮って、自分の質問を優先させた。そしてその質問は予想をはるかに上回るものであった。

「あんた、有希のことが好きなの？」

「……は？」

「だから、有希のことが好きなのかって聞いているのよ」

「どうしたんだ、突然。どうして俺が長門を？」

「だってあんた、昨日も有希と仲良く喋ってたじゃない。古泉君との話を早々に切り上げて」

「起きてたのか？」

「うっすらね。何喋ってたのかは聞こえなかったけど」

それは不幸中の幸い。こいつに聞かれちゃマズい話だったからないや、今はそんなことどうだっていい。どうしてこんなことをハルヒは聞いてくるんだ。

「それにあんた、盆踊りの時も有希のこと気にかけてたでしょ。プールの時もぼうつと有希のこと見つめてたし」

たしかに、それは事実だ。長門の様子が変だったような気がしていたし、あいつには世話になっている気もしたからな。

「だからって、どうして俺が長門のことを好きってなるんだ」

「あんたの考えてることくらい……」

ハルヒは視線を反らし、何かを呟くように口にした。その瞬間、外を通るトラックの騒音がハルヒの声を俺の耳に伝えるのを邪魔した。ただ、その時のハルヒの顔は何だか悲しそうに見えて、俺は少しドキリとした。

「とにかく、あんたが有希に気があることはわかってんだから。言っとくけど、あたしは別にあんたの恋愛にどうこう言う気はないわ！ただ、有希を困らせるようなことはしないでちょうだい！」

ハルヒは突然声を荒気始めた。どうしておまえが長門のことでそんなムキになるんだ。

「うるさい！あたしが言いたかったのはそれだけよ！」

ハルヒは伝票を残してイスから立ち上がると「今日はもう帰る。」

明日の予定は後でメールするから」とだけ言っつて足を動かし始めた。

「お、おい。ハルヒ」

俺も後を追おうと立ち上がったが、ハルヒの背中には着いてくるなという字が書いてあるかのようで、それを実行に移せなかった。機械音を上げて開く自動ドアをくぐり、ハルヒは炎天下の中をスタスタ歩いていった。

反対に俺はどかりとイスに座るとアイステイーを追加注文した。

頭を冷やして考えたかったからだ。ハルヒの言葉を。俺の長門に対する気持ちを。

第三話

さらに次の日。

結局俺は明確な答えも出せずに集合場所の駅前に着いた。しかし、そこには誰の姿もなかった。しばらくして現れたのは、散切りショートカットのセーラー服を来た宇宙人製アンドロイドだけだった。

「長門、ハルヒ達がまだ来ないんだが、何か聞いているか」

小柄な少女は無言で首を左右に振った。するとポケットの携帯が短く振動を伝えた。俺は携帯を取り出し、受信したばかりのメールを開く。ハルヒからだ。何を思ったか、今日はハルヒも古泉も、朝比奈さんまでも欠席するから、しっかり俺の気持ちを告げるよう書いてあった。

俺の気持ちっていつたつてなあ。取り敢えず、立ち話も何だからどこかに移動するか。

「どうやら今日は俺とおまえだけらしい。折角来たんだ、どこか行きたい場所はあるか」

長門はこくと頷くと、テクテク歩き始めた。

俺は無言で長門の後ろを着いて行く。しばらく歩くと、最初に二人で行った市内の図書館に着いた。まあ、こいつの行きたい所と言ったらここくらいだろう。

中に入り、それぞれ読みたい本を探し始める。俺は手近にあった薄い小説を手にとると、人のあまりいないテーブル席に座った。しばらくすると、百科事典のような厚みをした本を携えた長門が俺の真ん前の席に腰を降ろした。空いてる席はたくさんあるのに、どうしてここに座ったんだろう。そんな疑問もなくはなかったが、口に出すことはしなかった。些細な事だ。

長門は黙々と本を読んでいる。俺はというと、薄っぺらな本に早

々飽きてしまい、手持ち無沙汰となっていた。だから俺は昨日の自問自答を再び始めた。

長門は言った。繰り返される二週間で、一度だけ俺は長門に告白をした。俺は思う、今でさえこんなに悩んでいるんだから、過去の俺も相当悩んで長門に告げたんだろ。その記憶は全くないが、気持ちにはわからないでもない。最初に行ったプールの帰り、俺は長門を追いかけてまで声をかけた。長門の様子がいつもと違ったから俺はいてもたってもいられず、こいつの後を追いかけた。それはこいつが仲間や友達だからってだけじゃない。純粹に長門が心配だったからだ。こいつは大抵の事は一人で解決出来ちまう。でも、いや、だからこそ、何かあった時に俺はこいつを守りたいんだ。俺にとつて、長門は、特別な存在なんだ。

縁日の時もそうだ。長門がぼうつとお面を眺めているのを見て、俺はこいつに何かプレゼントをしてやりたいと思った。いつも世話になってるお礼ってのは、やっぱり長門に対する特別な気持ちの裏返しなんだ。

そうさ。俺は長門を守ってやりたい。記憶はなくなっちゃっても、心は継続される。心だって本当は脳みその中にあるんだろうけど、そんな野暮つたい理屈は古泉に任せておこう。断言できる、俺は長門のことを…。

「なあ、長…」

すべてを言い切る前に、長門は立ち上がった。そして俺の顔を見ながら一言こう言った。

「昼食の時間」

長門は適当にテーブルにおかれた俺の本を拾い上げ、自分の分と一緒に本棚に戻すと図書館を出ていこうとした。俺も慌てて後を追う。

太陽が照りつける外に出ると、長門は再び一言、

「私の家に」

と言つて、俺が手押しで持ってきたチャリを指さした。
「乗りたいのか」

こくりと長門。断る理由など全くない俺は、この前みたいに長門を荷台に座らせてペダルを漕いだ。

滝のような汗を流しながらマンションに着くと、長門は何も言わずに部屋まで案内してくれた。部屋の中はエアコンが程良く利いているように涼やかだった。

「そこで待っていて」

リビングでの待機命令を受け一人待っていると、長門は氷の塊を乗せた冷や麦を持ってきた。

「夏っぽいな」

「そう」

二人でチュルチュル啜っていると、突然長門が話を切り出した。

「あなたが教えてくれた」

「何を？」

「この食べ物が夏の風物詩だということを」

過去一万年千回のうちのワンシーンにも、俺は長門と冷や麦を食べたらしい。そうだな、冷や麦を食べると「ああ、夏だなあ」と感じるな。

「…そう」

長門は一拍置いてから応答した。その顔には何の感情もなかったが、どこか淋しげにも感じられた。やはり自分一人が記憶を維持しているというのは、どこかうら寂しいものなのだろうか。

「なあ長門」

「なに」

「前の俺はどう言つて告白したんだ」

「『おまえが好きだ』」

「それだけか」

「それだけ」

「そうか」
「そう」

俺は一口分だけ冷たい麵をめんつゆにつけ、頬張った。そして言った。

「なあ長門」

「なに」

「おまえが好きだ」

長門はじつと俺の顔を見ていた。再びの告白に戸惑っているのか、喜んでいるのか、全くわからない無表情。

「こんなこと言われたら、嫌か」

長門は首を静かに振った。

「嫌ではない。うれしい」

うれしい。長門はそう言った。いつも無感情な本読み少女のめずらしい感情表現に少し戸惑った。いや、恥ずかしかったというのが合っているのかもしれない。何にせよ、想いを伝えて良かった。

「この関係が9月にも続くようにしないとな」

長門はこくりと首を縦に振った。

陽が沈む頃、長門のマンションを後にした道中、ハルヒから突然の着信があった。

「あんた、有希にちゃんと伝えたの」

「ああ」

「…有希、何だって」

「嬉しいってさ」

「……そう。良かったじゃない。振られずにすんで」

一瞬の間と『そう』の一言に、俺は背中がゾクリとした。既視感？ いや、そんな生やさしいもんじゃない。何だ、この感覚。

「ちよっと！聞いているの！？」

いやな感覚はハルヒの怒号によりかき消された。気のせい、なのか。

「あ、ああ。すまん」

「まったく、こんなことでのぼせないでよね！まあいいわ。明日から元通り夏休みのノルマを達成するわよ！デートなんてしてる暇ないんだから！覚悟しなさい！」

「へいへい」

「じゃあねー！」

ハルヒは元気よく言った。まるで無理して元気そうに振る舞っているかのよう。それは切り際にぼそりと聞こえた独り言からも感じ取れた。

「ホント、これくらいで……」

ツーツーという電子音だけが俺の耳に聞こえた。電話を耳から離しポケットにしまおうとすると、再び着信音が響いた。古泉だ。

「なんだ」

「やあ、どうも。今から駅前に来れますか？二人だけで少しお話が二人だけというのが気に食わんが、行ってやる。帰る途中に寄れない場所ではないからな。」

夕方の少し冷めた風を浴びながらチャリを漕ぎ、リミテッドエスパー少年の待つ場所に向かった。

「思ったより早くて助かります」

「用件はなんだ。何となく予想はついてるからストレートに言っただいぞ」

「話が早くて助かります。では単刀直入に。どうして涼宮さんではなく長門さんに愛の告白を？」

「何故俺がそんなことを言わなきゃならない。俺が誰に何の告白をしようとするんだ。それに俺は拒否権を発動したはずだぞ」

「ごもつともです。ですが、過去のシークエンスにおいて、あなたは一度長門さんに告白しています。そして再び8月17日に。これ

がどういふことかお分かりで？」

「さあな。同じ事の繰り返しとでも言いたいのか」

「ご名答。考えてもみて下さい。同じように長門さんに告白して、同じように無限ループからの脱出に失敗する。再び記憶を失ったあなたに会う長門さんのお気持ちはどのようなものか」

「今回も失敗するとは限らないだろ！うまくやってみせるさ！」

俺は思わず声を荒げた。古泉が言うことは予測できていたはずなのに。だが俺は声を荒げずにいられなかったんだ。自分のためにも、長門のためにも。

古泉は神妙な面もちをしながら口を開いた。

「…わかりました。あなたのプライベートに首を突っ込む気も不要な言い争いをする気もありません。無限ループを脱出したい気持ちは同じです。ですから、今回で終わらせられるよう、僕も尽力しますよ」

古泉はそれだけ言うと、俺とは反対の方向に進んでいった。

第四話

さらに次の日の夕刻。俺たちは本物の花火大会に参加することになっていた。三人娘は再びの浴衣姿を見せる。長門は何事もなかったかのような無表情でいた。朝比奈さんは相も変わらずにお美しくかわいらしい。ハルヒは「少しご機嫌ななめか？」

「どうだっというじゃない、そんなこと」

ハルヒは浴衣をキレイに着こなしていたが、憂鬱なオーラをはつきり醸し出していた。

「行くわよ！」

不機嫌な団長を先頭に花火大会の会場に向かう。ハルヒは朝比奈さんと一緒に前へ。その後ろを古泉が。そして最後尾は俺と長門。

長門は最初ハルヒ達と肩を並べていたが、気がついたら俺の隣にいた。どうやらハルヒは取り計らったらしい。たしかに長門がそんな積極的な行動をするとは思えない。

「ハルヒはどうしてあんなにイラついているんだ」

俺は小声で長門に聞いてみた。

「彼女はジレンマに陥っている」

長門は答えた。ジレンマ？何のだ。

俺の素朴な疑問に長門は答えなかった。やっぱり長門でも違う女性の話をされるのは嫌なのだろうか。俺は話題を180度転回した。「この前の祭りで、どうしてあのお面を買ったんだ？」

長門は再び少しの間を置いてから答える。

「あなたが買ってくれた」

「俺が？」

「そう。その4日後にあなたは私に告白をした」

「そうか。それなら合点がいく」

長門は「何が？」と問いたげな表情で俺の顔を見た。

「あの時、俺は長門に何か買ってやりたいって思ったんだ。きつと、

その時の想いが残ってたんだろ？」

そうさ。記憶はなくなっても、俺の想いはなくなるんだ。もし万が一、今回も無限ループからの脱出に失敗しても俺は再び長門に恋をする。だから、絶対大丈夫さ。

だが、そんな俺の考えとは裏腹に、長門は少し考え込んでいるようだった。

花火会場は人だかりの山だった。ハルヒは着くや否や長門と朝比奈さんの手を引いて、人混みをかき分けて一番前に踊り出た。その姿を見失わないように、俺と古泉も後に続く。

一番前の場所は人の熱気もさることながら、花火の熱で壊れたサウナルームなみだった。最初は首を大きくあげて空にさく火の花々を見ていたが、飽き疲れたのか、ハルヒはもう少し人のいない場所に行こうと言い出した。集合時の不機嫌さはどこにいったのか、この時には、ハルヒは意気揚々と二人の官女を引き連れ回した。

少し離れた高台に着いても、ハルヒのご機嫌は揚々としていた。ハルヒはムスツとした顔は似合わない。太陽みたいな笑顔でいる方がずっといい。人によっては、朝比奈さんよりいいって思う奴もいるだろう。

俺はそんな事を考えながら、浴衣ではしゃぐ団長を見ていた。すると、ハルヒは俺の視線に気付いたのか、二人と距離を取りながら俺に近づいてきた。

「ちょっと、何見てんのよ」

「あ、ああ。すまん」

「あたしより、ちゃんと有希のこと見て上げなさいよ！あんた達、付き合ってたんだからね」

付き合っている、そんな事全くもって意識していなかった。そうだよな。告白してオーケーもらったってことはそういう事だよな。

「全く！このあたしが……」

ハルヒは言葉の途中で一回息を飲んだ。いや、言おうとした言葉を飲み込んだと言うべきか。ハルヒは自分に言い聞かすように言い直した。

「全く！団長たるこのあたしが団内恋愛を認めて上げたんだから、しゃんとしなさいよ！」

俺はハルヒから目を反らして長門を見た。長門は長門で俺とハルヒの様子を見ていた。嫉妬しているのか。長門の見えない感情には多少なりとも敏いと思っっている俺には、そんな風には見えなかった。いや、都合良くそう解釈してるだけなのかもしれないな。

第五話

次の日はバッティングセンターに行った。ハルヒは女子高生とは思えない程豪快なスウィングを見せ、ホームランを連発している。どうすりや連日連夜遊んで、あんだだけの力を出せるのかね。

「イラついているんですよ」

すべてを解っているかのように、古泉が見解を述べた。仕方ない、話を聞いてやるう。

「何にだ」

「あなたが昨日長門を家まで送って行ったことにですよ」

「はあ？そんな事に!？」

「そうです。彼女はあなたと長門さんに仲良くしてもらいたくないのですよ」

「あのなあ、古泉。俺と長門をくつつけた張本人はハルヒだぞ。どうして恋のキューピット役を買って出た奴がその恋路に腹を立たせるんだ。おかしいだろ」

「頭では思い合う二人の恋を成就させて上げたいと思っているのです。二人の共通の友人としてね。しかし、心の奥底では違います。あなたが他の女性と仲良くしているのは見たくない。いわんや付き合っている図なんてなおさらです」

「理不尽にも程があるな」

「素直ではない。ただそれだけですよ」

古泉はニコリと笑うと、きこちない台詞を言う三文役者のように、「さて、僕もバットを振ってくることにしましょう。久しぶりなのでうまく当てられるか解りませんが」

知ったこつちやないね。

古泉は俺の心を読んだのが、何も言わずにバッターボックスへと入って行った。その姿を見送った俺はベンチで本を読む長門に話しかける。

「元気か？」

「……」

顔を上げ俺の目を見つめるも無反応。元気ではない、そう言いたいと俺は感じた。

「おまえも早く無限ループから解放されたいのか？」

長門はさつきより強い目で俺を見た。肯定の意志と判断する。そうだな。一万回もやってりゃ疲れるよな。俺は長門の隣に座り、ふわり頭をなでた。

「大丈夫。何とかなるさ」

「そう」

抗うことなく俺の手を受け入れた長門は初めて声を発した。普通の女の子なら、ここで微笑むのだろうか。少なくとも俺は小さな笑みを見せていた。

だが、俺は楽観視していたに過ぎなかった。

ボタン、とバッターボックスへと通じるドアの一つが強い勢いをもって開いた。そこから出てきたハルヒはジロリと俺と長門を見ると、後手で再びドアを勢いよく閉める。無人のバッターボックスにはまだ125キロの球が飛んでいた。そして、ガシャンとフェンスにぶつかる球の音を背にハルヒはツカツカ俺たちのもとに歩いていた。

いつもの鋭い眼光は俺を射抜いている。

……いや違う。その目は俺に向けられているのではない。ハルヒは俺ではなく、長門をジトツとした目で見ていたのだ。そして一言。

「何だか気分が悪いから帰るわ」

ハルヒはそれだけ言うと不機嫌なオーラを醸し出す背中を俺たちに向けた。俺はその背中に話しかけた。

「ハルヒ」

立ち止まる小さな肩背。しかし、顔をこちらに向けようとはしな

い。俺はとっさに声をかけたため、なにを言えばいいかわからなかった。

「今日は『送りなさい!』とか言わないのか?」

ハルヒはなにも言わず、再び足を動かし出口へ向かった。

少し様子のおかしいハルヒの姿が見えなくなった後、俺は再び視線を小柄な文学少女に戻した。すると、なぜか長門は俺を責めるような目で見ていた。

「ハルヒのやつ、どうしたんだろうな」

長門は何も答えなかった。その代わり、静かに左手を上げ、人差し指で俺のおでこを一回押した。

俺は疑問符を浮かべて長門の顔を見る。なんだ? 今日は皆おかしな行動をする日なのか。

へろへろになった朝比奈さんと物足りなさそうな古泉がボックスから出てきて、今日の活動は終わった。

第六話

次の日、ハルヒからの連絡はなかった。

一日の休みを経て、太陽の熱が燦々と降り注ぐ今日は海水浴の日だった。炎天下の中、汗だくになってチャリをこいで駅前に行くと、皆水着を持って集合していた。

「遅い！罰金！」

ハルヒはいつもの台詞を張り上げて言う。一昨日の不機嫌さなど微塵も感じられない。

俺がそのことについて言及しようとすると、不意に小さな力が袖口を引っ張った。長門だ。そして俺と目が合うと、静かに首を横に振った。

「何してんの？！行くわよ！」

小柄な少女に気を取られているうちに、ハルヒは一人駅の方に向かっていった。朝比奈さんと古泉がそれに続き、長門も歩を進めた。

電車に乗り、しばらくしてたどり着いた海辺には、夏らしからず人は少なかった。

「さあ、SOS団貸し切りビーチよ！今日は昨日の分までジャンジャン遊ぶんだから！」

燦然たる笑顔を見せたハルヒは美人の未来人と無口の宇宙人の腕を取り、脱衣所に向かっていった。っていうか、勝手に公共の海を私物化したような事を言うな。

「我々もいきましよう」

古泉の言葉に従い、男二人も人数少ない脱衣所に向かった。

さて、幼い時に家族、少なくとも母親とプールに行った時、男の子は大抵の場合、プールサイドで母親を待つという経験をする。これは水着へのユニフォームチェンジにかかる時間が男の方が短いからであろう。しかし、概して例外と言うのもあるものだ。

古泉と共に脱衣所を出ると、砂浜にはすでに我らの団長が仁王立ちしておられた。出るところが出ているスレンダーな体に、それを自慢するかのような赤く派手な水着、男である俺が一瞬目を奪われてしまったのを誰が責められようか。

ハルヒは姿を確認するや否や、俺たちのもとに駆け寄ってきた。目敏く俺の一瞬の過ちに気付いたのか？

「なに突っ立つてんのよ、キョン。早く泳ぐわよ！」

キラキラ輝くような笑顔で、ハルヒは俺の腕を取り海に走り始めた。

「おやおや」

後ろで古泉のニヤケた声が聞こえたが、ここは無視しよう。ハルヒはやつと出てきた残りの女子団員にも

「早く来なさい！きつと気持ちいいわよ」

と声をかけた。そしてそのまま波打ち際に、とその手前、ハルヒは急ブレーキをかけ立ち止まった。俺は勢い余って海水にズッコケダイブを決める羽目になる。

「うおっ、とっ」と

顔から泥砂にまみれる俺の姿を見てハルヒは大笑いしていた。海水で顔を洗いながら、楽しそうに笑うハルヒを見て、俺はどことなく安心していた。こんなに楽しそうなら、もう同じ二週間を繰り返すなんてこと、ないんじゃないか。そう思っていた。

俺は手に水を溜めるとハルヒの顔目掛けて水を飛ばした。

「キヤツ！もう、しょっぱいじゃないー！」

「お返しだ！それもういつちよ！」

「平団員が団長に戦いを挑むなんていい度胸じゃない！」

なんとまあ安っぽい青春物語だろう。俺とハルヒは年甲斐もなく水の掛け合いを楽しんでいた。ハルヒが段々ムキになりだした頃、俺は浜辺で見守る面白経歴所有者3人に声をかけた。

「朝比奈さんもどうです？結構楽しいですよ」

「え、えーと、じゃあ、はい」

「僕も参加することにしましょうか」

朝比奈さんとおまけの古泉がそれぞれのペースでこっちにかけてきた。ただ一人、長門だけがパラソルの下で本読み体制に入ろうとしていた。

「長門、おまえもこっちに参加しろよ！潮風があつて気持ちいいぞ！」

長門はプールの時に来ていたスクール水着と違い、若草色のワンピース水着を着ていた。こういう姿の長門も新鮮でいいな。

すると突然、

「あたし、なんだか疲れちゃった。ちょっと休んでくるから、あんなたちだけで遊んでて」

ハルヒは背を向けて、長門と入れ替わりにパラソルのもとへと向かっていった。何がしたいんだ、こいつは。

そんな疑問を口にすると、古泉がニヤケた顔で言った。

「あなたも罪深い人ですね」

「何のことだ」

「涼宮さんは嫉妬しているんですよ。だからあなたの気を引こうとしているのです」

「気を引く？」

「ええ。何故彼女はあんなに扇情的な水着で必要以上にあなたにコ

コミュニケーションをとっていると思います?」

「さあな。まさか、俺が長門に気を向けているからって言うんじゃないだろうな」

「そのまさかですよ」

「またその話か。あいつは自分で長門と俺をくつつけたんだ。なのにそれを引き離すなんて理不尽にも程があるだろう。一昨日も言ったが」

古泉はふふつと笑った。一体何が可笑しいんだ。

「すべて無意識ですよ。彼女自身もその苛立ちの理由に気付いていないのでしょ」

意識的に恋のキューピット役を演じて、無意識に嫉妬に狂うなんて、迷惑極まりない話だな。

「そうですか。僕は逆に人間らしいと思います」

古泉は憎たらしいまでの微笑を見せた。人間は矛盾する生き物かどうかについて議論する気なんか、俺にはさらさらないぞ。

そんなことを考えていると、天をつくような、それでいて可愛らしい悲鳴が聞こえてきた。

「ひいえ〜!」

「朝比奈さん、どうしたんです?」

「こ、こ、これ!見て下さい!」

朝比奈さんは海水を指さした。その先を見ると、水面の下に何かがうごめいている。

「クラゲじゃないですか」

「こちらにもいますね。どうやらここはクラゲが大量発生している場所のようです」

古泉の言う通り、あたりにはちらほらと透明ゼラチン質の水棲生物が漂っていた。

「刺されたら大変ですね。砂浜に上がりましょう」

「は、はい」

海水に足をつっ込んでいた俺たちは足下に気をつけながら、砂浜

へと戻った。

すると突然、俺の顔にビニル性のボールが飛んできた。

「ぐっ！」

「泳げないんじゃないわね！みんなでビーチバレーしましょ」

ハルヒは打って変わって、再び元気満々な笑顔を俺たちに振りまいた。

クラゲ漂うビーチで、俺たち5人は円を形作って玉回しをしていた。ハルヒの「ボールを落とした人は夕食を皆におごること！」という罰ゲームに脅されつつ。

第七話

次の日、ハルヒは再びSOS団夏期活動を休養日にした。

そしてそれから、ハルヒは情緒不安定な行動を取り始めた。集まった日は、最初は元気瀧刺としているのだが、ある条件を満たすと不機嫌オーラを醸し出す。その条件とは、俺と長門が仲良く話していることだった。そんなハルヒを見る度に俺は心の中をひっかき回される思いをしていた。

そして向かえた8月30日。

「何だかんだで、予定の8割位しか消化出来なかったわね」

お馴染み、駅前の喫茶店での出来事である。

ハルヒは徳川埋蔵金の在処が記されているコピー用紙を見るような目で、ノートの切れ端を見つめていた。納得などせず明らかに名残惜しげでもある。本来なら俺も名残惜しく感じるはずだ。夏休みは明日一日しか残っていない。本来ならば。

終わりは来ない、今の俺は確信している。

「こんなんじや全然だめね」

ストローでコーラフロートのバナラアイスをつつき回しながらハルヒは落ち込んでいる様子だ。

「でも、うん。仕方ないわよね。ねえ、明日は何かしたいことある？」

長門は答えず紅茶に浮いたレモンの輪切りをじっと観察している。朝比奈さんは叱られた子犬のようにうなだれて両手を膝の上で握りしめていた。古泉は微笑みつつウインナコーヒーのカップを口元に

運んでいるだけである。

「まあいいわ。この夏は実現させたいこと、実現出来たし。充分だわ」

ハルヒは自分に言い聞かせている、この場にいる誰しもがそう思ったことだろう。ハルヒはこれでもう夏休みが終わっていいとは、明らかに思っていない。いくら言葉で表明しようと、胸の内は隠せていない。ハルヒの内面、しかもその浅い部分で、この状況に満足していないんだ。何が実現させたいことを実現出来ただ。本当は実現させたいことじゃなかったんだろう。

「じゃあ今日は」

ハルヒは伝票を俺によこして、

「これで終了。明日は予備日だけど、やっぱり休みにしちゃっていいわ。もういいから。また明後日、部室で会いましょう」

席から腰を浮かせてハルヒはすっとテーブルを離れ、俺は理不尽な焦りを覚えた。

このままハルヒを帰してはならない。それだと何も解決しないんだ。古泉が発見して長門が保証した繰り返し返される二週間、一万三千百五回目がやってくる。

だが、何をすべきなんだ。ハルヒの後ろ姿がスローモーションで遠ざかる。ダメだ、わからない。

立ち尽くす俺やみんなを残して、ハルヒは店を出ていった。

残され黙り込む俺たちの中で最初に口を開いたのは古泉だった。

「さて、あなたはこれで9月1日が来ると思えますか」

「ひどい嫌味を言ってくれるじゃねえか、古泉」

古泉は悪心を含んだ笑みをしながら、

「さあ、なんのことでしょう。まあ、明日が終われば皆さんの記憶はなくなってしまうからね、どう解釈されようと構いません」

それだけ言うと、古泉は静かに立ち上がった。

「それでは皆さん、また」

古泉が出ていくと、朝比奈さんも今にも泣き出しそんな顔を上げ、「あ、あの、わたしももう行きますね。キョンくん、長門さん、次こそは頑張りましょうね」

ハルヒと同じように、朝比奈さんも自分に言い聞かせている。未来に、いや故郷に帰れず一番辛いのは自分のはずなのに。

さっきまで五人座っていた席には、一組の男女しか残っていないかった。俺と長門だ。俺は長門を見ることができなかった。何が「9月もこの関係でいられるよう頑張ろう」だ。何が「ループを抜け出せる」だ。何が…。

ぼんっ。

俺が自責の念に捕らわれていると、不意にやわらかな力が俺の頭部に加わり、そのまま頭を撫でた。視線を上げると、長門が無表情で手を動かしている。

「そんなに自分を責めないで」
俺は何も口に出せなかった。長門の優しさが逆に胸を締め付ける。

「明日、うちに来て欲しい。最後だけは一緒に」

長門はそれだけ言って店を後にした。

しばらくしてから、俺もその場を立ち去った。

第八話

8月31日、宿題手つかず。宿題などもう知らん。どうでもいい。そんなものは放つて、俺は長門のマンションに向かった。呼び出しパネルに手慣れた番号を入力するとほぼ同時に、長門が受話口に出た。

「入って」

いつもの無言の対応ではなく、積極的な意思表示。機械的な音とともに開かれた自動ドアをくぐり、俺は長門の待つ708号室に足を運んだ。

ドアのチャイムを鳴らすと、ゆっくりとドアが開かれた。そして長門がいつもの無表情で俺を迎えてくれる。長門の後に続き、何もない簡素なりビングに案内されると、その真ん中のテーブルに真っ白な冷麦が二人前、それと色鮮やかなチキンサラダが置かれていた。

「昼食」

「あ、ああ。昼ご飯食べて来なかったから助かるよ」

何だろう。かつて長門がこれ程までの積極的アクションを見せたことがあるだろうか。はつきり言っていない。あるうはずがない。

長門、一体どうしたんだ。やっぱりおまえも…。

「おいしい」

「えっ」

考え込んでしまったがために、長門の質問を聞き逃してしまった。どうでもいいことだが、長門の顔を見上げた時、自分がずっと眉間に皺を寄せていたことに俺は初めて気付いた。

「おいしい？」

長門は語尾を少し上げて、同じ問いを発した。しかめっ面で食ってたんじゃ作り主としては当然の質問だろう。俺は出来る限り繕った笑顔を見せた。

「ああ、もちろんだ」

「そう」

食事が済むと、二人で食器を洗った。長門は基本沈黙仕様なので、こちらとしても無理に会話を繕ったりはしなかった。ただ、長門はそれすらも楽しんでるようだった。どうしてわかるかって？ いつも本読んでる時と同じ顔をしているからさ。

長門にしてみれば、これが望みの風景なのかもな。会話をするでも、何かするでもなく、ただ単に一緒に時間を過ごす。それが長門の望み……なのだろうか？

ふと時計を見ると、すでに短針は6の時を過ぎていた。もう夏は終わるというのに、まだ陽の長さに時間の感覚がぼやかされている。いや、まだまだ夏は続くのか。まったく、とんでもない話だぜ。

俺はゆっくり立ち上がり、家主に別れの挨拶をしようとした。だが、俺の肘袖をまるで生まれただけの子猫を持つような小さな力が掛んでいた。長門だ。長門は白く無表情な顔を俺に向けていた。

「行かないで」

長門はそう言った。口を開くまでのコンマ数秒が何十秒にも感じたのは、長門の珍しい意思表示に見蕩れてしまったからだ。長門の積極的な意思表示なんて滅多に見られないからな。だから、「わかった」と即答してしまったのも無理のないことだと思っ。実際明日

は来ないんだから、無断外泊したところで後々問題はないだろう。
俺が再びリビングの窓辺に座ると、長門も俺に寄り添って座り、
静かに読書を始めた。

「見てていいか」

長門は頷いた。

長門の姿をこんなにまで近くで、しかもずっと眺めるなんて後にも先にもこれきりだろう。ああ、記憶を失ってしまうのがもったいない。

俺は日が暮れるまで、長門の姿を見ていた。一頁一頁を繰る、その姿を。

ポケットで振動を繰り返す携帯を無視し続け、気がつくとも日付変更の少し前まで来ていた。俺がその時間になっただけに気付いたのは、長門が本を読むのを止めて顔を上げたからだ。長門は無表情のまま言う。

「頼み事がある」

初めて聞く長門の依頼。聞かない理由はないだろう。俺は優しい目を意識しながら口を開いた。

「なんだ？」

「目を閉じて」

「……こうか？」

俺は言われるがまま瞳を閉じた。その瞬間、暖かくやわらかいものが俺の唇に押し当てられた。俺は驚き、目を開けた。そこには何

の恥じらいもなく、ただ瞳を静かに閉じキスをしている長門の顔があった。

俺は再び目を瞑る。それが作法だからな。

長門の唇は長く俺を放さない。たが不思議と俺は平常心を保っていた。いや、むしろこれは……。長門、おまえは何をしているんだ。そんな疑問を感じ始めた頃、長門はゆっくりと顔を放した。そして言ってくれた。

「あなたの私に対する想い、あれは錯誤に過ぎない」

「……錯…誤？」

「そう。あなたも識閥下ではわかっているはず。本当のあなたの気持ち」

「何を言っ……」

「だから私は、あなたから私に対する恋愛感情を除去した」

な、なに？ 何を言っているんだ、長門。俺から恋愛感情を除去した？ 俺の長門に対する？

見た感じ、何も変わらない。だが、確かに長門の言う通りだ。俺は今、長門を見ても何も感じていない。さっきまで感じていた暖かみや温もりはまるで錯覚だったかのように消えている。

「これで以後の繰り返し返される時間の中で、もうあなたが私に告白することは、ない」

「長門、おまえ……」

その時だ。強烈な眠気が俺の脳内を襲った。時計を見ると、8月31日は残り30秒しかなくなっていた。こうやって時間が繰り返されるのか。くそつ。まだ話したいことがあるのに。

「長門、おまえ…人間らしい方が…いい…今日みたいに……」

ダメだ。眠気のせいか、本当にそうになっているのか、周りの世界がぐにゃぐにゃねじれ始めやがった。長門の声が遠退いて行く。

「だったら、私は逆に……」

逆に、何だ？ 逆に人間らしからぬ様に振る舞おうってのか？ そんなこと辞めてくれ。誰よりおまえが辛いだろう。おまえにもわかってんだろう。そうじゃなきゃ、そんな顔しないもんな。

涙を延々流して、失恋した女の子みたいに泣きじゃくる顔なんて……。

くっ……もう……ダメだ……いし……きが……長……門……。

何かがおかしい。

そう気付き始めたのは、お盆を過ぎた夏の盛りの日のことだ。

） e n d o f t h i s s e q u e n c e ｝

第八話（後書き）

きっかけ、なんてのは大抵どうってことないものなんだろう

言わずと知れたキヨンのセリフですが、僕がこの「エンドレスエイト」13104回目」を書こうと思ったときっかけはアニメ版のエンドレスエイトが何回も繰り返されたことにあります。

三回目あたりで、すでに多くのハルヒファンが愛想を尽かし始め、「もうハルヒは観ない」という声も上がっていました。長門ではありませんが、むしろな長門ではないので、そりゃあ殆ど同じ話を何回もされれば飽きるでしょう。でも、いや、だからこそ、ハルヒから離れていく人にエンドレスエイトをまた違った風に楽しめるきっかけを提供したかったです。

もしこのSSを読んで、エンドレスエイトの長門に、そしてその無言、無表情にこれまでと違った感想や印象を受けてエンドレスエイトをより楽しんで頂ける方が、一人でもいたら僕は歓喜します。

と言いつつも、現時点でこの話の続編、「エンドレスエイト」13105回目」があります。しかも、実は三部作構成だったりします。全てはあの話につながるために。そして、次はハルヒのターンです。

続編も近日連載を開始いたします。もう一度、僕の稚拙な文章にお付き合い頂ければ幸いです。

最後になってしまいました。この「エンドレスエイト」13104回目」にお付き合い下さいましたたくさんの方に御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8826h/>

【涼宮ハルヒ二次SS】 エンドレスエイト ~13104回目~

2010年12月25日00時25分発行